

第 123 回・日商簿記検定試験 3 級 第 1 問 仕訳問題類題

次の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

現金	当座預金	受取手形	売掛金
現金過不足	売買目的有価証券	未収金	前払金
立替金	仮払金	備品	支払手形
買掛金	未払金	前受金	預り金
引出金	仕入	消耗品費	有価証券評価損
有価証券売却損	固定資産売却損	雑損	売上
有価証券評価益	有価証券売却益	固定資産売却益	雑益

1. 藤本商店から商品 350,000 円を仕入れ、代金のうち 200,000 円については同店から為替手形の引き受けを求められたため、これを引き受け、残額については同店あての約束手形を振り出して支払った。
2. 月末に現金の実査を行ったところ、現金の実際有高が帳簿残高より 30,000 円過剰であることが判明したため、帳簿残高と実際有高とを一致させる処理を行うとともに、引き続き原因を調査することとした。なお、本店では、現金過不足の雑益または雑損勘定への振り替えは決算時に行うこととしている。
3. 新入社員向け事務処理用パソコン 3 台 (@100,000 円) と、事務用文房具 50,000 円を購入し、代金は月末に支払うこととした。なお、パソコンの設置費用 10,000 円については小切手を振り出して支払った。
4. 当期に売買目的で額面 100 円につき 97.5 円、購入手数料 20,000 円で買い入れた額面総額 1,000,000 円の伊達独眼流株式会社の社債を額面 100 円につき 98.5 円で売却し、代金は月末に受け取ることにした。
5. 津軽商店に対して掛けで販売した商品 80 個 (原価 : @8,000 円、売価 : @10,000 円) のうち、3 個が破損していたため返品されてきたが、商品パッケージが著しく破損していたため、店主が自家消費することとした。

・解答

	仕訳			
	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	仕入	350,000	支払手形	350,000
2	現金	30,000	現金過不足	30,000
3	備品	310,000	未払金	350,000
	消耗品費	50,000	当座預金	10,000
4	未収金	985,000	売買目的有価証券	995,000
	有価証券売却損	10,000		
5	売上	30,000	売掛金	30,000
	引出金	24,000	仕入	24,000

・解説

1. 仕入取引に関する問題です。この問題は【為替手形に関する仕訳】【約束手形に関する仕訳】に分けて考えると分かりやすいです。

・為替手形に関する仕訳

問題文に「代金のうち 200,000 円については同店から為替手形の引き受けを求められたため、これを引き受け」とありますので、藤本商店が振り出した自己受為替手形を引き受けたことにより、新たな手形債務が発生することになりますので、支払手形の増加として処理することになります。

★解答①

(借) 仕入 200,000 / (貸) 支払手形 200,000

☆参考・藤本商店

(借) 受取手形 200,000 / (貸) 売上 200,000

・約束手形に関する仕訳

これに関しては「仕入れに伴い約束手形を振り出した」というスタンダードな取引ですから、特に問題はないと思います。単純に支払手形の増加として処理するだけです。

★解答②

(借) 仕入 150,000 / (貸) 支払手形 150,000

上記の①②の仕訳をまとめると解答の仕訳になります。なお、解答の書き方について何人かの方からご質問をいただきましたが、個人的には支払手形 350,000 とまとめて書いたほうがいいと思います。ただ、200,000 円と 150,000 円に分けて書いても不正解になることはないと思いますので、この点に関してはあまりナーバスになる必要はありません。

2. 現金過不足に関する問題です。日商簿記検定 3 級では、現金過不足勘定を雑益または雑損に振り替える仕訳がよく出題されますが、本問はその前段階の仕訳（現金過不足勘定を計上する仕訳）を問う問題ですので、間違えないように気をつけてください。

ではここで、現金過不足に関する問題の解き方をもう一度整理しておきましょう。①期中に現金の過不足が判明した場合（帳簿残高≠実際有高）、とりあえず現金過不足勘定で一時的に処理しておいて、②理由が判明したものについてはその勘定科目に振り替え、③最終的に原因が特定できなかったものについては決算整理仕訳で雑益または雑損に振り替えることとなります。

本問の場合、問題文に「**本店では、現金過不足の雑益または雑損勘定への振り替えは決算時に行うこととしている**」という記述がありますから、②や③の現金過不足勘定の振り替えに関してはこの問題で考慮する必要はないということとなります。

上記の「①期中に現金の過不足が判明した場合（帳簿残高≠実際有高）、とりあえず現金過不足勘定で一時的に処理しておく」ということは、具体的には（帳簿残高＝実際有高）となるように、現金過不足勘定を使って両残高のズレを修正するための仕訳を切ることを意味しますので、本問の場合は帳簿残高を 30,000 円増やして実際有高の金額と一致させます。

★現金過不足勘定を使って両残高のズレを修正するための仕訳

（借）現金 30,000 / （貸）現金過不足 30,000

なお、現金過不足に関する問題は、第 110 回の問 4や第 111 回の問 4、第 115 回の問 1、第 117 回の問 1でも出題されていますから、併せて確認するようにしてください。

3. 固定資産の購入と消耗品に関する問題です。本問は【固定資産の購入に関する取引】と【消耗品に関する取引】とに分けて考えると理解しやすいと思います。

・固定資産の購入に関する取引

この取引のポイントはズバリ「購入原価＝購入代価＋付随費用」ということが分かっているかどうかです。備品だけに限らず、建物や車両などの固定資産を購入した際に、**不可避免的に発生した費用（付随費用）は取得原価に含めて計算することになります**ので、パソコンの設置費用 10,000 円を取得原価に含めることを忘れないように注意してください。

購入代価 300,000 円＋付随費用 10,000 円＝購入原価 310,000 円

★解答①

(借) 備品 310,000 / (貸) 未払金 300,000
(貸) 当座預金 10,000

・消耗品に関する取引

こちらに関しては、問題文の「**事務用文房具 50,000 円を購入し**」から消耗品をイメージできたかどうかポイントになります。消耗品に関しては購入時に消耗品勘定を使って資産計上する場合と、消耗品費勘定を使って費用処理する場合がありますが、**本問は問題文で与えられている勘定科目の中に消耗品勘定がありません**ので、消耗品費勘定を使って費用処理することになります。

なお、購入時に費用処理したもののうち、決算期末において未費消分がある場合は、以下のような仕訳を切ることになりますので併せてご確認ください。

★解答②

(借) 消耗品費 50,000 / (貸) 未払金 50,000

☆参考・決算期末において 5,000 円の未費消分があった場合の仕訳

(借) 消耗品 5,000 / (貸) 消耗品費 5,000

ではついでに、消耗品を購入時に「資産計上」する場合の仕訳も確認してみましょう。購入時に費用処理した場合と大きく異なる点は、**決算期末に消費した分を費用計上する点**です。仕訳は以下のようになります。

☆参考・消耗品購入時の仕訳

(借) 消耗品 50,000 / (貸) 当座預金など 50,000

☆参考・決算期末において 5,000 円の未費消分があった場合の仕訳

(借) 消耗品費 45,000 / (貸) 消耗品 45,000

ポイントは、決算時に振り替える額が、未費消分なのか費消分なのかという違いです。簡単にまとめておきますので、この論点についてはこの場で理解するようにしてください。

【消耗品を購入時に資産（消耗品勘定）処理する場合】

購入時・・・支出額を消耗品勘定で認識

決算時・・・既費消分を消耗品費勘定で認識

【消耗品を購入時に費用（消耗品費勘定）処理する場合】

購入時・・・支出額を消耗品費勘定で認識

決算時・・・未費消分を消耗品勘定で認識

固定資産と消耗品がセットになった問題は、第 113 回の間 3でも出題されていますので、併せて確認しておいてください。

4. 有価証券の売却に関する問題です。本問は、有価証券購入時に購入手数料が発生していますので、単価を使って計算する場合は忘れないように考慮してください。

☆参考・伊達独眼流株式会社の社債を購入したときの仕訳

(借) 売買目的有価証券 995,000 / (貸) 現金など 995,000

有価証券の売却損益は、有価証券の帳簿価額と売却価額との差額により算定しますので、機械的に金額を当てはめていってください。慣れるまでは以下のように1つ1つ段階を追って考えていくほうが分かりやすいと思います。

・有価証券の帳簿価額 = $1,000,000 \text{ 円} \times 97.5 \text{ 円} / 100 \text{ 円} + 20,000 = 995,000 \text{ 円}$

・有価証券の売却価額 = $1,000,000 \text{ 円} \times 98.5 \text{ 円} / 100 \text{ 円} = 985,000 \text{ 円}$

・差額 = 10,000 円 (帳簿価額 > 売却価額・・・**売却損**)

なお、本問のように商品売買取引以外で発生した債権・債務については、未収金・未払金勘定を使って処理することになりますので、売掛金勘定や買掛金勘定を使わないように注意してください。

・商品売買取引に伴い発生した債権・債務 → **売掛金・買掛金**

・商品売買取引以外で発生した債権・債務 → **未収金・未払金**

有価証券の売却に関する問題は、第102回の問5や第110回の問1、第116回の問5、第118回の問1、第126回の問4でも出題されていますので、併せて確認しておいてください。

5. 売上戻り・自家消費に関する問題です。本問はかなり難しい問題ですので、【売上戻りに関する取引】と【自家消費に関する取引】とに分けて考えることをおすすめします。

・売上戻りに関する取引

この取引に関しては**売上時の逆仕訳**をしてやればいだけですので特に問題ないと思います。

☆売上時の仕訳（戻り分のみ）

（借）売掛金 30,000 / （貸）売上 30,000

★解答①

（借）売上 30,000 / （貸）売掛金 30,000

・自家消費に関する取引

こちらの取引が少々厄介です。問題文に「**3個が破損していたため返品されてきたが、商品パッケージが著しく破損していたため、店主が自家消費することとした**」とありますので、お店の商品を私用で使ったということが分かります。

ではここで簡単な例題を使って自家消費の仕訳を考えていきたいと思います。まず、会社のお金を使ってA商品（原価：@10,000円、売価：@15,000円）を販売用に7個と自家消費用に3個の合計10個を仕入れた場合、仕訳は以下のようになります。

☆自家消費の例題①

（借）仕入 70,000 / （貸）現金など 100,000

（借）引出金 30,000

自家消費用の商品3個（原価：@10,000円）については、**本来であれば店主のポケットマネーから支出すべきもの**ですから、会社財産から支出した場合は会社の純資産の減少を認識するために、資本金または資本金の評価勘定である引出金を借方に計上して処理することになります。

では次に、仕入時には自家消費を想定していなかったが、仕入後に自家消費することになった場合の仕訳を考えていきます。まず仕入時には自家消費を想定していない訳ですから、10個全部を通常の仕入として処理することになります。

☆自家消費の例題②

(借) 仕入 100,000 / (貸) 現金など 100,000

上記の仕訳を前提に、自家消費を反映させる仕訳を切ることになりますが、結局は最初から自家消費するつもりだった仕訳(①)と同じ結果になるわけですから、②を①に修正する仕訳を切つてやれば良いことになります。

☆自家消費を反映させるための仕訳(②→①)

(借) 引出金 30,000 / (貸) 仕入 30,000

ではここで、本問に戻ってみましょう。問題文に「3個が破損していたため返品されてきたが、商品パッケージが著しく破損していたため、店主が自家消費することとした」とありますので、「仕入時には自家消費を想定していなかったが、仕入後に自家消費することになった」という上の仕訳と同じパターンであることがお分かりいただけると思います。

よって、自家消費を反映させる以下のような仕訳を切ることになります。24,000円という金額は、原価8,000円に数量3を掛けて算定しますが、この際に売価を使わないように気をつけてください。本問の自家消費に関しては売価のデータを使うことはありません。

★解答②

(借) 引出金 24,000 / (貸) 仕入 24,000

①②の仕訳をまとめると解答になりますが、本問はかなり難しい問題ですので、時間に余裕の無い方は思い切って捨ててもいいと思います。なお、引出金という勘定科目については、特に指定が無い場合は資本金勘定で処理しても正解となります。